

江戸幕府による蝦夷地直轄について(2)

江戸幕府は、外国船に備えるため、寛政10年(1798)正月、津軽藩に命じて500人の兵を二厩より箱館に渡らせ、同地を守らせました。今回は、この頃の松前藩内の経済状況を見ています。

寛政元年(1789)の「クナシリ・メナシの戦い」の後、阿部屋村山伝兵衛は、「日本長者鑑」にも掲げられるほどでした。その没落も早いものでした。

また阿部屋は、飛騨屋同様に、多額の金を松前藩に貸し付ける「金主」として、藩からの信頼を得ていたにも関わらずこのような事となり、それは松前藩の不安定さの表れでもありました。

近江出身以外の請負商人

松前藩内の商業および場所請負業の大部分は、最初は近江商人の手にありました。その後、他の者も参入してきます。

飛騨屋久兵衛は、飛騨国増田郡から江戸に出て、数十年に渡つて材木業を営み、その後場所請負を行いましたが、寛政元年の飛騨屋事件(クナシリ・メナシの戦い)の後に没落します。

江戸の商人小林屋宗九郎も材木業を営み、飛騨屋同様に松前藩に巨額の金を立て替えていましたが、藩の返済金の代わりに石狩場所を引き渡されました。

紀伊国有田郡栖原村出身の栖原角兵衛は、江戸で飛騨屋と取引をしていた材木商で、福山に支店を出した後、天明年間(1781)1789)になって場所請負を行いました。伊達浅之助は、陸奥国伊達郡から江戸に出て商業を営み、天明年間以後に店員の林右衛門を松前福山に派遣し、寛政5年同地に支店を設けました。

「阿部屋」の事業

「阿部屋村山伝兵衛」は、能登国羽咋郡安部屋村出身で、祖父にあたる初代伝兵衛の時に松前福山に移住し、宝曆年中(1751~1764)から場所請負に従事しました。

三代目伝兵衛は、最も理財の才に富んでいたとされ、元文3年(1738)松前に生まれ、初代伝兵衛の没後、直に家業を継ぎ、阿部屋の最盛期を迎えます。松前城下にその本拠地を置き、福山港に程近い河原町に店があつたとされています。

寛政元年の飛騨屋事件により、飛騨屋久兵衛が請負つていた釧路・厚岸・霧多布・国後・宗谷の五場所について、飛騨屋はその取りを免ぜられ、松前在住の三代目伝兵衛が藩命によりこれを引き継ぎました。

翌年には樺太場所などを開き、各場所には、自分の船舶を使って多量の米・塩・その他の貨物を送り、各種の魚網を備えて漁法を伝習し、新たに漁場を開くなど、アイヌの人々を心から服従していましたが、風説により、

させだとされています。

これらの場所のうち、藩主直領の場所については、藩の直営で行われるもので、伝兵衛は差配人(管理の代理人)に過ぎませんでした。

しかし、その実情については、寛政3年4月の松前藩から伝兵衛に達した書状によると、「自分の請負御場所と同様に心得て差支え無

松前藩の失策

松前藩は、藩庫の収入を増やそうとして、伝兵衛に對し過酷な処置をしました。しかし、これにより、松前藩の経済は大打撃を被り、伝兵衛から引き継いだ場所の多くも、その經營に失敗しました。

また幕府は、寛政10年に幕吏を派遣、蝦夷地調査のため「蝦夷地御用掛」を置くと、失意の伝兵衛を「按内」として起用しようとしたので、松前藩も寛政11年2月、伝兵衛に福山・川原町の居宅を返還しました。そして同年4月には、1代に限つて大広間格の藩士として採用し、場所や秋味の権利、家屋・倉庫などを還付しましたが、再び成功することはありませんでした。